



昭和45年(1970年)

6月号 (No. 300)

 社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文

- 東南稜からのエ峰登頂に成功……………1
 アイス・フォールの状況……………1
 第一キャンプの建設まで……………2
 キャクツェリンの事故……………3
 成田潔思隊員の急死……………3
 住吉ドクターの手記から……………4
 南壁登攀は断念……………4
 秩父宮記念学術賞授賞理由……………6

会員通信

- ダウラギリ六峰に登頂……………5
 古い山岳について……………6
 アンナプルナⅢ峰から……………7

図書紹介

- ヒマラヤ巨峰初登頂記……………6
 ……望月 達夫

図書室便り

- 新刊図書受入報告……………6
 洋書受入報告……………7
 地図受入報告……………7
 図書委員会報告……………7

会務報告

- 5月理事評議員会……………7
 昭和45年度通常会員総会……………7
 4月支部長会議……………8
 第258回現地小集会報告……………8
 新入会員……………9
 ルーム日誌……………9
 会員異動……………10
 昭和45年度収支決算報告……………11
 昭和45年度収支予算案……………11

東南稜からのエ峰登頂に成功

松浦・植村・平林・チョタレの二隊

本会エベレスト登山隊の第一次登攀隊松浦輝夫、植村直己の二隊員は五月十一日東南稜からエベレスト(八八四八m)登頂に成功、引き続き第二次登攀隊平林克敏隊員とサードのチョタレも翌五月十二日東南稜から登頂に成功したとネパール外務省が五月十四日発表した。一九五三年のイギリス隊以来六隊目の成功である。

松浦、植村両隊員は五月十一日午前六時十分、標高八五一三mの第六キャンプを出発、雲一つない快晴に恵まれ酸素器具も威力を発揮し、午前九時十分(日本時間午後一時十分)世界の最高峰に立った。ラスト・キャンプから標高差三三五mを僅か三時間で登り切った。八時ごろにはすでに南峰直下に達するというハイペースで、南峰からは酸素を毎分四リットルに増やした。頂上の雪はさほど固くなくわずかに靴がもぐる程度。ローツェ、マカルーとすばらしい眺望が広がっていた。風は五mほど、寒さもそれほどではなかつた。

二人は頂上の雪を掘り、第一キャンプで急死した成田隊員の写真とお守り、ピース一箱をそえて埋め、写真撮影し、約一時間頂上にとどまったのち下山、第六、第五キャンプをへて一気にサウス・コルからローツェ氷河を下り、午後五時半大塚登攀隊長らに迎えられて第二キャンプ(六五〇〇m、前進キャンプ)まで帰着した。

第二登攀隊の平林隊員とサードのチョタレは五月十二日午前六時第六キャンプを出発、七時四十五分南峰に着いたところから北側(チベットの側)からの風が強くなり、頂上へ続く雪稜上では二十m近い強風に襲われ、約三十分風の止むのを待った。再び行動を開始したが風でザイルが流され、雪庇にひっかかるなど悪条件が重なり、時間をくったが、八時四十五分から三十分ほど風がおさまったのでピッチを上げ、九時四十五分平林をトップにチョタレも頂上に立った。

頂上には前日第一登攀隊がおいてあった日の丸とネパールの国旗が石に結ばれてはためいていた。平林隊員はそれを記念に持ち帰ることとし新しい旗ととりかえ、チョタレはネパール国王夫妻の写真を持ち、ネパール帽をかぶって写真におさまったあと、国王夫妻の写真と帽子を雪の中に埋めた。平林隊員も登りにかぶっていた酸素呼吸袋を内蔵した国産ヘルメットをその上に埋めた。下降にはいま一つの米国製酸素呼吸器をつけ、十時十五分頂上を去り、再び強風と戦いながら午後六時二十分第四キャンプ(七四五〇m)に戻った。

アイス・フォールの状況

三月二十三日BC入り以来、ただちに二十四日にアイス・フォールの偵察ルート工作、荷上げと本二十九日の連日メンバーを投入してこれに当らせたいが、現在のところ一応の目安はついたものの、まだ完全にルートは確保出来ない。

現在までの状況を報告すると次の通りである。
 一、一次、二次、即ち六九年にくらべかなり変化している。これは氷河であるので当然のことだが、一次、二次の参加者の言によると、ことは歩きにくいということである。しかしこれもたまたま昨年とくらべてのこと、アイス・フォールが動いて歩きにくい上に危いのは致し方ない。
 二、暖かくなると荷上げをした二、三回かかると、より完全なルートに春らしく暖かくなってきた、スプツェ、ローラ、エベレスト西稜、リントレン面などにかかると氷塊がごろんと落下し始めた。アイス・フォール自体は目に見えて動いていないが、いつ凍結しているセラックスが崩れるかわからない。このように危険に見えるところは避けて、ボーターが荷をかついで通れるルートを見つけた。
 三、二十八日に中継デボ・キャンプを五九〇〇mに設置。即ちBCから五九〇〇mのルートは五日間で確保した。しかしながら五八〇〇m C I (六一〇〇m)までは、ボーターの通れるル

ートはなかなかむずかしい。BCからでは距離があるので中継キャンプを設けたので、これはあくまでも一時的なもの、C I へのルートが出来たら当然撤収して隊員もシェルバも泊らないことにする。

四、中継キャンプへ最初に入ったのは植村、井上とシェルバ二名であるが、その報告によると、昨秋ブルー・ドルジェの事故のあったクレバス、ならびにアイス・フォールを抜け切ったグループの台地の付近もかなり下流に移動した様子が一変しているということであった。

五、三月二十九日、中継キャンプに七名の隊員を増強して二、三日のうちにルートを確保する予定。

ひとことという、見た眼では測り知れない巨大なアイス・フォールである。そのただ中を歩くと、さっぱり様子がわからないというのが実情、しかしわが隊の一次、二次の経験者はさすがで、きわめて安全なルートをすでに下半分確保したわけである。

三月二十五日 中央ルート、小西、植村、ルート開拓。松浦、加納、平林安藤はルート工作。神山ほかルート補修。西稜寄りルート藤田、大森、錦織この日二パーティが出たが、藤田の主張によって今までの各隊の通った西稜寄り(これは中央にくらべてのこと)ルートをもうと考えるべきであるということによる。

によって、全員で西寄りのルートを見る。松田、藤田、松浦、平林、大森、土肥、渡辺、加納、神崎、鹿野、安藤、神山ほかシエルバ十一名。八時二十時五七〇〇mの地点、十四時五九〇〇m（昨秋プ・ドルジュの事故のあったところ）この結果左寄りのルートに全員異議なく、五七〇〇mの地点は心配のないルートとなる。

三月二十七日 晴。ルート工作隊松田、錦織、鹿野、井上は五九〇〇mまで。以降西寄せを一般ルートと呼称する。大塚、住吉、渡辺、河野、長田、木村、堅野は高度順化隊。

三月二十八日 晴。一般ルート工作と高度順化住吉、田村、平野、土肥、吉川、相沢、佐藤、中川、シエルバ六名。上部ルート工作隊井上、植村、シエルバ二名。植村パーティは五九〇〇m以上のルートをCⅠまで偵察し、中継キャンプに泊る。本日から五八〇〇mに中継キャンプを作る。六人用二張。中央ルートのジエラ梯子は大塚、嵯峨野、伊藤、広谷、河野、長田、シエルバ六名で撤収。

三月二十九日 曇り、晴。中継キャンプにルート偵察と工作隊の主力を投入する。藤田、松浦、平林、小西、加納、神山、大森、シエルバ六名、中継キャンプ入り。中継キャンプの井上はBCへ下り、植村とシエルバ一名は藤田隊とともにルート工作のため中継キャンプに残る。広谷、田村、平野、土肥、神崎、嵯峨野、伊藤、シエルバ十名、ローカルボーター六名、アイス・フオール・ボーター三十名、計四十六名の中継キャンプへの荷上げ開始。初日なので平均十五キロ、隊員はザイルの中にはいる。

成田は二十五日BC入りしてすぐ風邪で、一人では歩けない。吉川、土肥も風邪、平野は恢復した。けだるさを感じるBCである。

昨三月二十八日松方隊長がロブジェ（四九五〇m）にはいったのメッセーが中島ドクターからきた。血圧が二百以上で自覚症状はないが、ドクターが慎重に様子を見ているとのこと。

第一キャンプの建設まで

アイス・フオール上部はむずかしいルートである。そしていまなおこのルートは危険をはらんでいる。このアイス・フオールにJME70の人員と物資すべてを投入し正面切って取り組んでから十二日目である（三月二十五日～四月五日）正直にいうと人事をつくしたルートといっているであらう。もし不測の事故にあうとすれば、それはエベレストに憑かれた男達の運命ではなからうか。

荷上げ大作戦は二日目にはいった。隊員は区別なく二十キロを背負ってアイス・フオールの荷上げに従事している。これを書いているいま（四月五日）隊全体をあけてアイス・フオールの崩壊におのきながら肉体の苦痛と対峙してそれを乗り越えようとしている。

エベレスト登山の第一章は最高潮にはいっている。すでに予定より一週間以上遅れているこのアイス・フオールの突破は、いまやあと残された三日間の荷上げ大作戦をもってピリウドを打とうとしている。

この間無事であればアイス・フオールの危険の大部分ははらったといえる。四月四日六〇〇mにCⅠを建設し、田村、井上、イラツエリン、ダノルプの四名がはいった、四月八日までのボッカ期間にCⅠ以上の荷物概算十〜十二トンが完了すればこの第一期の作戦は成功である。

四月六日、ここまで書いてきたときちょうど十一時の交信時間す前、風邪で休んでいた住吉が、「スキー隊のシエルバがアイス・フオールでやられたらしい」と飛び込んできた。と同時に無線機がけたましく鳴り、松田のせきこんだ声が飛び込んできた。「いわゆる廊下と呼んでいるところの入口の下で、セラックスの崩壊があり、スキー隊のシエルバが五、六名やられて埋没しました。JACのパーティはいまのこの異様な模様」ああ速いのにやられたか、激しいショックと共に住吉と二人で無線にかじりつき、情報の整理と、遭難現場と上方のデボ・キャンプ、CⅠのメンバーへの連絡、指示に忙殺される。

現場の松田サーブの指揮のもとにスキー隊と協力して救出作業は迅速に行なわれた。

現場には松田、中島ドクター、小西、神崎、中島寛、吉川、デボ・キャンプに近しい少し上に藤田、河野がおり、直ちに引き返して救出に当たる。JMEメンバーとシエルバの確認を直に行なったところ、BCからボッカに当たっていた広谷、渡辺、平野、加納、安藤、長田、伊藤、嵯峨野はデボ・キャンプで無事。CⅠの田村、井上、デボ・キャンプの松浦、土肥、神山、植村も安全なことがわかり、約一時間後にはシエルバ、ローカル・ボーター、アイス・フオール・ボーターも全員無事であることが確認された。

四月五日午前十時二十五分ごろ、スキー隊の隊員、シエルバがJMEの連中の休んでいるところを超越して、ひとかたまりとなりセラックス地帯を通過しようとしていたとき、事故が発生した。セラックスの陥没の震源地は不明だが、昨年のプ・ドルジュ、一次隊のCⅠ付近の陥没（藤田の話）プライテン・パッハの地点などと総合する

とすべて一脈通じる同じ地点であり、グルンドと氷河の流れからみて、いわゆるこのアイス・フオールの中で最も移動の激しい注意すべき地点ということになる。

JME隊はまさに紙一重、時間にして三十秒ぐらいの差、藤田、渡辺、平野のザイル・パーティは足もとと亀裂、震動から走り登ったが、もうだめだと思ったと実感を洩らしていた。また昼食のためと休みしていた松田らはズズと一ひょう鈍い音にはっと息をのむと、氷河は左側からさながら津波のようにウェービングしながら右の方へ生きもののようにならうなり動いていった。一瞬のうちに目の前のスキー隊のザイル・パーティがのまれ、その上にセラックスが崩壊した。藤田隊もやられたと思ったと目撃した松田はさすがに言葉を詰らした。

またスキー隊の大塚、藤瀬、安間、安久のザイル・パーティは陥没した底に落とされたが、直にブロックの直撃を受けず救出された。二時間を経過した昼ごろには、現場も大分おさまり、死亡したシエルバの人数と氏名なども判明した。BCではスキー隊と協力し無線基地をJMEの本部に移し、連絡を一本化した。死亡したのはニマ・ドルジュ、ツエリン、タルベ、バサン、クンガ・ノルプ、カミ・ツエリン（ローカル）の六名で、午後二時にはすべての遺体が引き上げられ安全な場所に安置された。

この間松田の指揮のもとにJME隊員の救出活動は目覚ましいものがあつたことを付記しておく。BCには午後四時半全員無事だった。

正直のことろ全く自分のパーティが遭難したと全く同じショックであった。三月二十四日以降、このアイス・フオールにルートを求め、工作し、慎重にも慎重を重ねた対策もこの巨大な

自然の猛威の前には全く無に等しい。私はキャンプに設けたチョールテンに登山の安全を祈願したお守りをそなえた。アイス・フオールやエベレストに散った人々の霊をなぐさめ、また日本の山で亡くなった友人、知人のかたみの供養を、そして多くの支援してくれた人達に感謝するセレモニーを行なった。

きょう六日は裏に服する意味でBCのメンバーは全員休み、中継キャンプも同じで、CⅠはサーブのみABCのキャンプ・サートの偵察に動き、シエルバは休みとすることにした。これからお焼香である。

行動日誌をしるす。

三月三十日 晴後曇り雪、BC、デボ・キャンプ往復松田、中島寛、渡辺、錦織、鹿野、吉川、安藤（以上順化）、デボ・キャンプ・ルート工作藤田、松浦、平林、小西、加納、植村、神山、大森。

デボ・キャンプからCⅠ（六一〇〇m）の上部ルートはアイス・フオールの崩壊が激しくルートの安全がみずかしい。ルート工作隊は連日苦労しているが、なかなかよいルートが見つからない。午後五時の交信でCⅠへ抜ける見込みはついたと連絡があった。

三月三十一日 晴。上部ルート工作（CⅠまで）藤田、松浦、平林、小西、加納、神山、大森、植村（植村はBCへ下る）

ボッカ隊（CⅠまで）渡辺、吉川、安藤、下部ルート工作（CⅠまで）松田、中島寛、錦織、鹿野、上部ルート下見（CⅠまで）大塚、住吉、午後五時半スキー隊藤島、三浦、銭谷、加藤安久の公式訪問を受け、両方としてはJMEの作ったルートを使用する場合は、①荷上げの終わった後、つまりあと一週間くらい待ってほしい（危険なため）②このルートは決して安全とい

えないので事故が発生してもJACの責任ではない。以上の二点を確認し了承してもらった。

三泊四日で藤田隊に上部アイス・フォールのルートワークをまかせたが九十%出来た。

四月一日 晴 藤田、松浦、平林、小西、加納、神山はデボ・キャンプ↓C Iルートワーク↓BCへ下る。

田村、河野、嵯峨野、伊藤は藤田隊と交代。
広谷、平野、土肥、神崎、長田、NHK野口、中川はデボ・キャンプ住復ボッカ。中島ドクターはロブジェンからBC入り。

上部アイス・フォールの安全保守基準を作り、パトリール、ポーター支援の基準とする。特に第一、第三ラダー各自について独自の所見を作り、そして赤信号、つまり通行禁止の場合を明示した。

前日に引き続き藤田隊は最後の仕上げを行なったので、ルートそのものはかなり安定したものとなった。

四月二日 晴 後曇り田村、河野、嵯峨野、伊藤は上部ルートワーク、ラダー保全、ローカル・ポーターのサポート。広谷、平野、土肥、神崎はBC↓デボ・キャンプラダー↓BC。野口中川はラダー付近撮影、デボ・キャンプ泊り、木村、相沢BCからデボ・キャンプ往復、中島ドクター、大森、成田はBCからロブジェンへ下る。成田具合悪し。四月四日から五日間に一大荷上げを実行する。

キャクツエリンの事故

四月九日 まことに残念ながらアイス・フォール荷上げ中のアイス・フォール・ポーターがセラックスの崩壊によるブロックで圧死する事故が起きました。以下その模様を報告いたします。

す。
一、四月九日午前七時二十分（ネパール現地時間）

二、アイス・フォール下部五五〇m付近

三、遭難者氏名 キャクツエリン（ナムチエ）三十六歳、妻、子供三人

四、死亡原因 セラックス崩壊による頭部胸部圧迫死

遭難概要 第一期アイスフォールのルート開拓と、これに伴う荷上げは四月四日から五日間の予定で開始され、予定通りの荷上り量約十トン強の目標に達することになっていった。この間、四月五日にはスキー隊のアイス・フォールの事故などもあって一日停滞

はしたものの荷上り作業最終日の本四月九日はシエルバ、ローカル・ポーター十五名、アイス・フォール・ポーター三十名のみのボッカで隊員の分担は必要なく、隊員は休養となった。彼らはJMEのサーブが自から荷を背負ってボッカする態度に極めて友好的な活動を行ない、本日も午前六時三十分から第一キャンプの荷上げを開始した。

アイス・フォール・ポーターの仕事は一応アイス・フォールの荷上げ終了と共に終わるわけであり、本隊の計画も本日をもって休養を取り、第二期八千mへの到達の期間に入る予定で、作戦計画も出来上ったところであった。

午前八時中継キャンプ（五八〇〇m）の松浦隊員からトランシーバーの連絡があり、アイス・フォール・ポーターが到着したとの報告がBCに入った。順調に進みつつあると思われたその直後、キッチンの方から「二名こちらに下ってくるぞ」という声に、おやっと思つてアイス・フォールの彼方を見ると、下部にひとかたまりの人影と、急ぎかけ下ってくる二名の姿が見えられた。「さては」と不吉な予感と同時に

眼鏡で眺めてみると、ルート上では一番安定したところなのでケガをしたのかなと思つていられるうちにシエルバのウルキッパが息をきり切つてかけつけ「セラックスが崩れて下敷きになったすく」にドクターにきてくれ」と報告。「しまった」と思つたがもう遅い。すぐに住吉、広谷のほか、藤田ら八名が朝食もとらず現場へ急行、約四十分ほどで事故の様子が判明した。

現場はBCから一ビッチで、いつも皆がひと休みする場所から約七、八十m登ったところで、狭いセラックスの間を通り、水のガレ場にはいるところである。そこまではルートはずすかり補修されて歩きやすくなつており、不安は感じなかったところであったが、何かのショックのためか、セラックスの上部の直径六、七十mの水塊がポーターのキャクツエリンの頭部に当たり、彼は前のめりに倒れ、クレバスに下半身埋った。二十mロープの後にいたポーターがこれを救出しようとしたところ更にブロックが落ちてきたため救出出来ず、さらにキャクツエリンは水塊に激しく打たれた。

キャクツエリンは三十人のアイス・フォール・ポーターの中でも最も優秀で、強いシエルバであり、サードのチャタラーも強く推せんし、解雇後も引き続きC I A B Cのボッカに使用する予定であった。

そんな彼は連日よく動き、ノルマを消化していたので、最終日のきょうは荷上げも楽で、ゆっくり後から出発した。日ごろよく働く者が、スタートの時間を遅らせたために、一瞬の水塊の落下に幽明境を異にしたわけである。

もし、本当にもし、一、二秒の差で彼は死なずにすんだものと思う。いまさらいってグチになつてしまふが、われわれとしては、連日ルート補修、安全確保のためのボッカ・サポート、

隊員自身よりむしろアイス・フォールポーター、ローカル・ポーターなどにおおいに気を配り、出来るだけのことやつた。とくにスキー隊の事故などもあるが、一層万全の策をほどこしたのである。このかわりアイス・フォールは、まったくどこにその落しあなを秘めているのか、もはやわれわれにはすべはない。

最後部にいたため、ほとんどのポーターはこの事故を知らず荷上げを行なつたが、現場に居あわせたシエルバはほごすすべを知らず、BCから救援に上つた隊員によつて救出が行なわれたが、時すでに遅く、住吉ドクターの検屍により死亡が確認された。

救出作業は迅速に行なわれ、正午ごろにはBCに安置されたが、スキー隊の事故の四日後に再びわが隊にも悲しい事故者を一名出す次第となつてしまつた。

何の言葉もない。ベース・キャンプは憂慮につつまれているが、三日間の葬式と、この休養期間に再び気をとりなおして山に向かう以外に途はない。再度の事故を起さぬように慎重にそして謙虚に考え直したい。

〔追信〕①死者家族への補償金三万ルーピー（約三千ドル）は別途で送付お願いいたします。
②四月九日午後一時十五分第二キャンプ（前進二五・五km）を六五〇〇mに建設、小西、神崎、イラツエリン、ザンブの四名入る。しかしあすはC II、C Iの全隊員、シエルバはBCへいったん下ります。

成田潔思隊員の急死

四月二十一日夜、第一キャンプ六〇五〇mで夕食中、いまだ元気だった成田は急に様子がおかしくなり、テントに居合わせた住吉ドクターの手当て

の甲斐もなく二十時四十五分に死した。

この日成田君はC IからC IIへシエルバの荷上げを指揮してC IIに到着、私とも会い、元気に談笑し、十四時ころではC Iへ下りた。十四時ころとあいさつを交し、元気がよく下つていった。そして私が成田君の事故を知つたのは、C Iの住吉からの無線連絡で「急性心筋梗塞で、九十%回復の見込みはない」という。十九時三十分ごろのことであった。

つい数時間前なんに元気に、再会を約した彼が……私にはとても信じられなかった。そんなことがあつてたまるものか、彼は残された十%の可能性できつと息を吹き返すであらう、打ちのめされた私にはただそれを祈るばかりであつたが、二十一時ごろ再度住吉から無線連絡があり、息を引き取つたと報告があつた。

成田潔思、成田潔思、いくら呼んでももう還らない、三十九名の隊員の中で、私にはまことにユニークな存在として映つた頑丈な身体つき、ひげの濃い若々しい顔つき、竹を割つたようなざつぱりした気風、それは彼の早口のしゃべり方に現われていた。しかし近代的な若者の風情と相反して、いつのまに腰をひっかけ、Yシャツのすそがはみ出て、腹を出しながら梱包作業や、事務所でのバックキングリストを作つていた彼のかまわない姿、これは大した奴だと私にほほえましく眺めていたものだ。

そんな印象の彼は先発としてカルカタ、カトマンズの三十トンの荷の通関、トラッパの輸送に当つても、きつとへんを出しながら縦横無尽の動きをしたに違いない。私達本隊が遅れてカトマンズの空港に着いたとき、フォルクスワーゲンのミニバスを運転して、妻を幅をかぶつて迎えにきたのは彼

だった。日焼けし、すっかり板につき自信にあふれていた。半パンツに素足ゴムソリ姿。もうここは俺んちだよ、といった気安さも感じられ頼もしうかざりであった。『おいこの車はどしたんだい』と聞くと、『柴田さん(コロンボ計画関係者)のですが借りたのです』『ライセンズはないですよ平気ですよ』とシャーシャーとしたものだ。空港から宿舎までさわやかな風を切って走るフォルクスワーゲンを運転する彼の横顔を見たとき、これはやっぱり大物だという印象が強かった。

身体も大きく、力も強かった彼は、当然のことながら大いに喰いかつ飲んだ。富士山の総合テスト終了後の山麓のコンパでもコップ酒で深更まで、そして早朝起きてケロリとしていたのも彼だった。カトマンズのJAC宿舎でも、キャラバンの食事でもいち早く食卓につき、二人分の分量を一番早く平らげたのも彼だった。

もちろん、彼に伍して決してひけを取らない豪ものぞろいであったが、彼には何ともくれない天衣無縫さがあり、誰にも好かれ、話題の中心となっていた。

キャラバン中は歩くのが早いいため私などは昼食でもなかなか一緒にいられなかった。タンポチを中心とした二週間の第一期高所順化の期間はさすがの彼も初めての高さを経験しさすがにゲンナリしていた時もあったが、私と行を共にしたイムジャの山旅行ではすっかり元気になっていた。いつも赤い羽毛服を着ていたのだ。『それどうしたんだい』と聞くと、『ナベさん(田辺寿氏)のですよ』と聞いてニヤリと笑っていた。上衣のすそをこがしたのを白いパンソウコウではり当てていたのが目に鮮やかであった。

そんな元気な彼が、若さにまかせて

とでもいうのであろうか、ロブジェネの湧水で水浴したのが原因かどうか知らぬが三月二十三日にB Cに入ってから後風邪を引き、それをこじらせてしまい、食欲もなく、テントで寝たきりになってしまった。ドクターの投薬もそれほど効果なく、やむを得ず、四月二日大森ドクターと同道して再びロブジェネに下り、ここで松方隊長、中島ドクターと共に滞在して休養した。四月九日まで一週間の休養で、すっかり回復した彼は再びB Cに入ってきて私達を喜こばせた。

この十七日間のブランクは、彼にとって精神的にも肉体的にも大きな負担となったことは否めないことであつた。彼のせん細な神経や、初めてのヒマラヤ登山という面から考えあわせても、何らかのあせりはあつたと思えても、それらの二週間余の隊の行動はアイスフォールのルート開拓(第一次第二次参加者中心)他のメンバーの高所順応、中継キャンプ建設、第一キャンプ建設と、スキー隊の六人のシエルバの死亡事故はあつたとしても着々と計画は進んでいたわけであるが、四月十日われわれのボーター、キャクツエリンの死亡事故で四日間停滞、この間彼はB Cで軽いトレーニングを行ないコンデイション作りを専念した。

ドクターからも戦列に復帰を許された彼は、第二期作戦の第二陣として四月十四日平林ほか十四名の隊員、シエルバ十六名と共にC Iへ入った。そして十五日、全隊員はC Iに集結して、アイスフォールの通行を一時禁止(B CのC Iの通行)して第二期の目的である四月十八〇〇m到着を目指した。鬼門アイスフォールを通過したという事で全隊員、シエルバも安心してキャンプの建設と荷上げに従事することが出来た。そして日を追ってキャンプは進み、四月十八日にはC II(A

B C) 六四〇〇m、南壁B C六七〇〇m、C III六九三〇m(ロッセエフエース下)と、アイスフォールの異状とその事故のため遅れた十日間をとりかえすべく、きわめてスピーディーに進められた。もちろん、隊員三十二名、シエルバ三十八名、アイスフォールボーター十三名と計八十三名によるキャンプ建設、ボツカ力からすればクーム盆地にキャンプを進めるのはそれほど苦ではない。このように隊全体の第二期の計画の運行はきわめてダイナミックに進められた中で、第二隊としてC Iに入りた成田の体調はまだ本格的とはいえず大森ドクターとザイルを組んでコンデイションを行ない、もっぱらC Iに滞在して高所順応と荷物の管理人として活躍していた。C Iには住吉ドクターが主任のような形となり不調の神山など隊員の健康管理を行ないながらボツカとC Iの管理の指揮を行っていた。

彼がC I入りした四月十四日から一週間ぐらい滞在した後はきわめて元気に、四月二十日にはからのボツカ隊(シエルバ、ローカルボーター)十七八名と共に空身でC IIへ到着、そして前述のように私と元気にあいさつを交しC I下っていった。そしてそれが最後の笑顔であった。山で死亡はほとんど事故が主であり、私の経験の中でも心臓マヒは一例を除いてはほとんどなく、ましてやあんな元気な成田にその運命があつたとは誰が予測し得たろうか。

彼の死亡報告というより、好青年であった成田の個性豊かな面影を書きとめることしか出来ない。彼の心臓は停止し、肉体は生命を断つたが、彼の魂は、私を始め、隊員一同、彼をとりまく友人、知人の中に永久に生きていることを信じて疑わない。

(大塚博美)

住吉ドクターの手記から

四月二十一日 六時十五分ABCからの指示により酸素器具をC IよりABCに送る。そのあとテントにて住吉成田、錦織、植村、井上でゆっくり朝食をとる。十時三十分、井上、植村、アンザインレンC IよりABCへ、成田、ダノルプ、アンザインレンC IよりABCへ、成田の順化程度不明のため荷物なく空身、ダノルプにも成田の状態を説明し、空身で同行させる。決して無理をせず、どこからでも引き返すこと。午後四時成田、ダノルプC I帰着、続いてABCから長田、平野、田村もC I着。成田前胸部の痛みを訴えるもきわめて元気である。痛みはC Iへ初め登ってきた時と同じ痛みであった。あすABCへ登ってはどうかとたずねる。住吉は「ABCへ登るのはもう二度くらい復したあとでなければだめだ」。住吉と一緒に行動すること、監視つきだ。胸の痛みは筋肉痛と思うが、痛ければ錦織の使っている酸素を吸ってみたらよい。一分間二リットルで十分くらいやってみよう」と答える。

成田二度酸素吸入するも少しも痛みは楽にならないとのこと、住吉は「順化していれば楽に感じないだろう」と答えた。

このような会話をしながら夕食を待つ。午後六時ごろ住吉のテントで住吉成田、錦織、田村、平野、長田の六人で夕食、成田は胸部痛で食欲がないとのこと。オジャを半分のみ、続いて両腕のシビレ、だるい感じが訴える。しかしニコニコして六人で楽しく食事をす。デザートに果物の罐詰を開けたとき、突然成田の正面にいた平野の不安な表情で、住吉は「成田、成田」と呼ぶも答えはなく、「返事せんか」と

重ねて呼びかけたが返事はない。すぐそばに行つて診断すると(六時二十五分)すでに脈はふれず、呼吸停止、瞳孔中等度散大、直ちに酸素吸入、人工呼吸、注射(カルニゲン、ネオフィリン、テラプチク、ビタカンフアー等)施行するも、全然反応なし。八時五十分瞳孔白濁し始め、治療中止、死亡を確認する。

南壁の登攀は断念

本会エベレスト登山隊は、二回にわたり東南稜からの登頂に成功したが、五月十二日、未踏の南壁からの登頂を断念した。南壁攻撃隊の加納、嵯峨野の二隊員は五月十日、南壁上部大岩壁の直下に到達したが、積雪がきわめて少なく、逆層の部分で露出しているうえ、すぐ上部のイエロー・バンドからの落石が非常に多いためついに断念しなければならなかった。中島寛隊員は、五月十七日五〇〇m付近でこぶし大の落石を右足に、また加納隊員も軍艦岩直下でソフボール大の石を腰に受け軽傷を負った。

このため第四期計画として第三次登頂隊員として田村、イラ・ツェリン、第四次登頂隊員サウス・ボルから一氣に登頂をねらう小西、ジョン・エリ、第三キャンプからサウス・ボルへ直接登る新ルート開拓に吉川、嵯峨野、伊藤の三隊を決め、五月十四日から行動を再開、五月十七日田村隊はサウス・ボル、吉川隊はサウス・ボルへ直登に成功、また第四キャンプから渡辺隊員が原田、野口らとサウス・ボルを往復し女性最高到達記録を作ったが、その後悪天候が続いたため五月十九日登頂を断念、全員五月二十日ベース・キャンプに下った。

会 員 通 信

ダウラギリ六峰に登頂

私も大阪府山岳連盟、関西登高会のダウラギリ四峰（七六六〇m）登山隊は、目標の四峰の登頂には失敗いたしました。従来無名峰とされておりました第六峰（七二六六m）に登頂、五月六日、木村、岩佐、山村隊員が元気に帰国いたしましたのに続いて五月七日午後九時大団隊空室港着のタイ航空機で野村哲也隊長、中村副隊長が無事帰国いたしました。残りの三隊員は五月十日ごろまでには帰国するはずですが、とりあえず六峰登頂と帰国の御報告を申し上げます。

登山隊は三月六日に大阪を出発以後ほぼ順調に進み、四月二日、ダウラギリ連峰の南西面カベ・コラのBC（四一〇〇m）に到着、キャンプを進めたあと、四月十六日主稜線上に六九〇〇mの第六キャンプを建設し、中村副隊長、水谷、木村、山村、河津隊員とシルバのノルプが入りました。翌四月十七日午前九時中村・河津、木村・山村のザイルパーティで登高を開始同十一時三十五分七二六六mの六峰に四人そろって登頂しました。

しかし六峰から偵察の結果、四峰までは途中七一〇六mのジャンクションピークをはさみ深く切れ込んだコルが二つあって長距離のうえ、技術的にも相当困難なため、今回の人員、装備では安全性が確保出来ないかと判断し、四峰を断念しました。四月十七日中にCIVまで下り四月十九日全員BCへ下山しました。

ベースキャンプの撤収が早かったのは、ちょうどわれわれが下山にかかるのと入れ違いに韓国のチュレン・ヒ

マール隊が入山してきましたが、当地方はポーター事情が悪く、集めにくいのでこの韓国のポーターをさっそく雇ったため、二十日に急いでBCを撤収しキャランを開始、カトマンズに四月二十九日に帰着しました。

今回の遠征が一応の成果をあげたものとひとえに皆様の物心両面にわたる御支援があったればこそと厚く御礼申し上げます。

昭和四十五年五月八日

大阪府山岳連盟、関西登高会ヒマラヤ登山隊代表 福原喜代男
事務局長 前田武治
隊長 野村哲也

古い「山岳」について

渡 辺 真 一

「会報」すなわち、現在の「山」は数年前より月刊となった。これはまさにJACの快挙である。われわれ地方会員にも毎月の「山」が届くと「ああ、これはJAC会員なのだなあ」と思ひ、できることなら、恥ずかしい登山はしたくないのだと自覚させられるのである。なによりも、登山界のホットなニュースが知られることがうれしい。ところが、われわれが過去をふりかえる時である。会員であれば誰れもいろいろな面で会の歴史を知りたいと思うことがあろう。

それを知るにはやはり古い「山岳」を読むことが、なんといつも第一の道である。「山岳」はなんといってもJACの素顔であり、またJACの歴史そのものである。（沼井鉄太郎氏の労作「山岳五十二年」があるにせよ。）この道程を通らず会を知ることにはできない。

現在約三千人といわれる会員のなか

る人が一体どのくらいいるだろうか。おそらく十パーセントにも満たないと思像される。日本の近代登山史を知ろうとする、または、人のあまり近づくこととしない珍しい山に登ろうとする、この時必ず「山岳」は必要な書物となる。しかるに、「山岳」は手に入らぬのである。

私がJAC以外に所属する小千谷山岳会でも、古い「山岳」を少しは所持している者はいても、方々歩き廻らねばならぬため、その損耗度が激しく困惑しているのである。東京在住の会員ならば、必要とあらばルームに出かければ見ることができよう。しかし、やはり自分の書棚にそなえておきたい。

古い「山岳」のような古典（個々有名登山者の著作は別に独立した本として上梓されている）は、そのままの姿で接したいものである。「山岳」はその独自の風格をもっている。

そこで、会には図書委員会というような優れた組織があるのだから、自らの手で編集、出版を、お願いしたいのである。今はやりの覆刻版となると、とうてい費用の点で不可能と思われる。が、なるべく原本のイメージを損くならないで縮刷版でいかがであらうか。そう高価なものにはならぬだろう。わるくてもまたま古本屋で発見した古い「山岳」よりは——これには私のような貧乏人には手がでない。欲しくてたまぬ山好きが沢山ののだから、わるくとも商業ベースの面からみても損はしないだろう。ひとつ、委員会が討議してはいただけまいか。エベレストに登ることも、この事業をおしすすめることも、同じくらいのメリットはあると思うのだが、いかがであらう。

原稿募集 会報は会員皆さまのものです。お気軽に原稿をお寄せ下さい。

6月下旬発売!

日本山嶽志

複製版

《付録II 越後の旦那様》

高頭式編集・日本山岳会複製協力

キク判 本冊 二四〇〇頁 定価 四八〇〇円

付録 二二〇頁

山岳各記(全国二一九四山)

登山術

山岳諸説

地質構造概論

山岳噴火年表

山岳表

主要山岳地図(四色)

主要山岳写真

各種索引

日本山岳界のバイブル

こゝに再現成る!

登山家や旅行者のために名勝旧跡は勿論、山勢・位置・周囲・登路・標高・里程・眺望・溪流・滝・宿泊所や飲用水の有無から樹林草木の様子、更に文章詩歌俳句・伝説・絵や写真を入れ、専門家には動植物・気象・地質に至るまで詳述。

◇日本山岳会の生みの親である新潟県長岡の高頭翁が、全財産を投げ打って明治39年に発行した本書は、山のバイブルとして、今なお多くの人々に愛読されている。

◇原本の少ない現在、その複製版の発行が望まれていたが、要望に応じて、日本山岳会と野島出版は、この名著を全く同じに複製した。

◇著者の「人となり」や業績、著書の価値や意義について、あらゆる角度から浮き彫りにした。付録の「越後の旦那様」は、日本山岳会の会員各位により執筆編集されたもの。

★全国有名書店又は直接弊社へご注文下さい★

株式 野 島 出版

新潟県三条市一ノ木戸一九四七
【電話】三条(〇二五六三)③〇五二(代)
【振替口座】新潟 三四番

武田久吉氏への『秩父宮 記念学術賞』授賞理由

「多年にわたる高山植物
の生態に関する研究」

武田久吉氏は明治十六年三月二日生れ、東京外国語学校終了後、札幌農学校および東北帝国大学予科講師を経て英国に留学、ロンドン・インペリアル・カレッジ・オブ・サイエンス・アンド・テクノロジー、およびパーミンガム大学において植物学を専攻し、帰国後は大正五年京都帝国大学医科大学講師に就任したのを始めとして北海道帝国大学水産専門部、京都帝国大学農学部、九州帝国大学農学部各講師などを歴任、その間、大正五年八月には理学博士の学位を授与された。戦後は連合軍総司令部天然資源技術顧問、米國地質調査部技術顧問、国立公園中央審議会委員、文化専門審議会専門委員などを歴任、昭和三十五年紫綬褒章を受賞、同三十九年勲四等に叙せられ今日にいたっている。

氏は明治三十八年有志とともに日本山岳会を創設、わが国における近代的な登山術発展の端緒を開くとともに、みずから広く日本各地の山地を跋渉して専門とする植物学の研究をすすめて、多くの貴重な研究成果を発表した。すなわち氏はすぐれた登山家として豊かな体験に基づいて、日本アルプスをはじめ日本各地の高山植物についてそのこととくとの生態について調査し、とくに、得意とする写真撮影技術を駆使して余人の企及し得ない精細、正確な観察を行ない、その生態的研究は数多くの図版を含めた著作として著わされ、多くの新知見をもたらすとともにわが国の自然美をも内外に紹介することに寄与した。

また、氏は植物の研究のかたわら自

然に對する深い愛情から、わが国における天然記念物の保護につとめ、この分野においても大きな足跡を残した。とくに植物学上貴重な宝庫といわれていた尾瀬沼について、遠く明治三十八年同地方一帯を踏査して以来、尾瀬沼一帯の学術的価値とその保護の必要性について一貫して啓蒙普及に当たった氏の活動はめざましく、わが国の高地における貴重な高山植物の保護、保存事業の推進には、氏の指導力に負うところが極めて大である。

以上のように氏の今日の数十年前にわたる活動は、これすべて日本の山日本の自然、日本の高山植物の学術的探求と、自然の保護にあり、今日、わが国高山植物に関する研究の発展と自然保護思想の普及につくした氏の功績は極めて顕著であつて、氏の業績についてはさきに紫綬褒章が下賜され、また勲四等に叙せられたのも故なにしてないが、高令にいたつた現在においてまこと偉大であり、わが国植物学界山岳界の先駆者、開拓者としての功績は永く銘記すべきものがある。

秩父宮記念学術賞

故秩父宮殿下には、財団法人日本学術振興会総裁として、昭和八年から同二十三年にわたる十五年の間、振興会の発展ならびにわが国の学術振興のために多大の御尽力を賜つた。昭和二十八年殿下が御薨去のち、殿下の各方面における御事蹟を記念するため、財団法人秩父宮記念が設立され、その事業の一つとして、殿下が日本学術振興会総裁として長年御尽力された業績を記念するため「秩父宮記念学術賞」を制定、その授賞は日本学術振興会が行なうことになった。

日本学術振興会は、殿下が御生前豊かな御経験にもとずき、格別深い関

心を寄せられた「山」に関し、顕著な研究業績をあげたものに、この学術賞を贈呈することにし、今回が六度目である。なお第五回までの授賞は次のとおりである。

第一回（昭和三十八年）「ネパールヒマラヤにおける学術的調査研究」京大生物誌研究会々長芦田謙治
第二回（昭和四十年）「市立大町山岳博物館の創設以来の館の活動業績」大町博物館長藤巻厚美
第三回（昭和四十一年）「第一次南極越冬隊の業績」隊員代表西堀三郎

第四回（昭和四十二年）「北アルプスの自然」富山大学学術調査団特別賞「カラコルム・ヒンズリクシ学術探検隊報告」京大生物誌研究会
第五回（昭和四十三年）「富士山における山岳気象の観測研究」藤村郁雄

なお第六回秩父宮記念学術賞選考審査委員会委員は次の七氏である。
委員長和達清夫、委員東俊郎、木原均、高垣寅次郎、本田弘人、横有恒、松方三郎

（付記）右記事は昭和四十五年三月五日日本学術振興会発行の「第六回秩父宮記念学術賞授賞理由」より抜粋した。（編者）

アンナプルナIII峰から

宮崎英子

私たちはいまCⅢ（五三〇〇m）からCⅣへの途を開いています。ボカラから百四十一人のポーターと出発したのは三月二十三日、八日間でB C到着の予定でしたが、途中から雪の行進となつたため、だしのクローリが減つてしまひ、十日目の四月一日三三〇〇mの地点に荷物をデポしました。

そこから隊員とシェルパでB Cへの荷上げを完了したのは四月十六日、その間八日にCⅠ、十一日CⅡを設けました。CⅡからCⅢへの間は大きなク

レバスとアイスフォールにはばまれ苦勞しました。私がCⅢへの偵察に行つた日は周囲に六つの雪崩を見ました。さすがにアンナプルナIII峰はむずかしい山です。でも隊員は元気で頑張つております。四月二十六日

図書紹介

ヒマラヤ巨峰初登頂記

M・ファンティン編
牧野文子訳

編者ファンティンは映画芸術を担当して、多くの探検隊に参加している登山家、短い年月のうちにアフリカ、インド、グリーンランド、中央アジア、メキシコ、カラコルムなどへのイタリヤ探検家の十三隊に同行、同時に記録映画製作という貴重な業績を残した。現在はアルピニズム関係の文献収集に献身しているという。

本書はまずA八〇〇〇mVの山々へという序章からはじまり、アンナプルナ、エベレスト、ナンガ・パルバート、K2、チョー・オユ、マカル、ロツニ、ガッシャブルムII、ブロード・ピーク、ヒドン・ピーク、ダウラギリ、シヤパンマという順序で八千m峰十座の初登頂したほぼ八千mに近いガッシャブルムIVとカンジュン・サル二峰の初登頂を併述している。

記述にあたっては、専ら原筆者の文章をそのまま採用する方法がとられてゐる。例えばエベレストの第一次攻撃はW・ノイスの「エベレストの一九五三年」世界の山々（一九五四年ミラノ刊）所収IIから引用され、わがマナスルは横・今西氏の「マナスル登攀」II「ヒマラヤン・ジャーナル」二〇巻所収IIから引用されている。なお、夫々

の登攀に活躍した登山家、例えばハントだとかクジだとかの経歴が所々に載せてあるのは、読物として変化があるばかりでなく、文献としても非常に便利である。更に本書の特徴は見事な写真もさることながら、ルート図を豊富に挿入し、且つ主要な巨峰の東西南北各方面から見たスケッチを収めてあることだ。

翻訳は、さきに「ガッシャブルムIV」の佳い邦訳を出された会友牧野文子氏の手になるだけに、洵にたのしく読んでゆける。詳細な人名索引を付し、邦文文献も加えた関係文献約三百点を挙げてゐる。

この訳書を見て、直ぐ思い出すのは、同じ八千m峰登頂をあつかった深田氏の『ヒマラヤ登攀史』（岩波新書）である。本書が原典引用を主としてゐるに對し、深田氏は周知のように、すべて著者の頭をくぐつて出てきたものである。本書が稍々専門的なのに對し、深田氏のは一般向きである。夫々に特徴はあるが、深田氏の本でやや満足しない読者は、本書に拠ればその目的はとげられよう。しかし、岩波新書の限られた分量の中にあれだけの内容を、あれだけ手きわよくまとめたものは、知っておいていいと思う。

菊野四〇ページ、8ポ二段組という文字通り浩翰の書であり、翻訳の労は定めし並々ならぬものがあつたと思う。多くの読者にむかえられることを期待する。（望月達夫）

（一九六九年十二月、あかね書房刊、定価一八〇〇円）

図書室便り

新刊図書受入報告

長野県飯山北高等学校寄贈
（1）『飯山北高スキー史』昭和44

昭45・4

- あかね書房寄贈
(1)『大島亮吉全集3—先蹤者—』昭和45
(2)『山嶺』昭和44—45
(3)『山嶺』昭和44—45
(4)『山嶺』昭和44—45
(5)『山嶺』昭和44—45
(6)『山嶺』昭和44—45
(7)『山嶺』昭和44—45
(8)『山嶺』昭和44—45
(9)『山嶺』昭和44—45
(10)『山嶺』昭和44—45

- (1)『山嶺』昭和44—45
(2)『山嶺』昭和44—45
(3)『山嶺』昭和44—45
(4)『山嶺』昭和44—45
(5)『山嶺』昭和44—45
(6)『山嶺』昭和44—45
(7)『山嶺』昭和44—45
(8)『山嶺』昭和44—45
(9)『山嶺』昭和44—45
(10)『山嶺』昭和44—45

- (1)『山嶺』昭和44—45
(2)『山嶺』昭和44—45
(3)『山嶺』昭和44—45
(4)『山嶺』昭和44—45
(5)『山嶺』昭和44—45
(6)『山嶺』昭和44—45
(7)『山嶺』昭和44—45
(8)『山嶺』昭和44—45
(9)『山嶺』昭和44—45
(10)『山嶺』昭和44—45

- (1)『山嶺』昭和44—45
(2)『山嶺』昭和44—45
(3)『山嶺』昭和44—45
(4)『山嶺』昭和44—45
(5)『山嶺』昭和44—45
(6)『山嶺』昭和44—45
(7)『山嶺』昭和44—45
(8)『山嶺』昭和44—45
(9)『山嶺』昭和44—45
(10)『山嶺』昭和44—45

- (1)『山嶺』昭和44—45
(2)『山嶺』昭和44—45
(3)『山嶺』昭和44—45
(4)『山嶺』昭和44—45
(5)『山嶺』昭和44—45
(6)『山嶺』昭和44—45
(7)『山嶺』昭和44—45
(8)『山嶺』昭和44—45
(9)『山嶺』昭和44—45
(10)『山嶺』昭和44—45

- (1)『山嶺』昭和44—45
(2)『山嶺』昭和44—45
(3)『山嶺』昭和44—45
(4)『山嶺』昭和44—45
(5)『山嶺』昭和44—45
(6)『山嶺』昭和44—45
(7)『山嶺』昭和44—45
(8)『山嶺』昭和44—45
(9)『山嶺』昭和44—45
(10)『山嶺』昭和44—45

- (1)『山嶺』昭和44—45
(2)『山嶺』昭和44—45
(3)『山嶺』昭和44—45
(4)『山嶺』昭和44—45
(5)『山嶺』昭和44—45
(6)『山嶺』昭和44—45
(7)『山嶺』昭和44—45
(8)『山嶺』昭和44—45
(9)『山嶺』昭和44—45
(10)『山嶺』昭和44—45

- (1)『山嶺』昭和44—45
(2)『山嶺』昭和44—45
(3)『山嶺』昭和44—45
(4)『山嶺』昭和44—45
(5)『山嶺』昭和44—45
(6)『山嶺』昭和44—45
(7)『山嶺』昭和44—45
(8)『山嶺』昭和44—45
(9)『山嶺』昭和44—45
(10)『山嶺』昭和44—45

- ruar & März 1970.
3. "Alpinismus" No. 3, 1970.
4. "Deutscher Alpenverein" Jahrgang 22, Heft 1, Jan./Feb. 1970.
5. "The Geographical" Vol. 135, Part 4, December 1969.
6. "La Montagne et alpinisme" Année. 95, No. 74 & 75, n. Octobre & Decembre 1969.
7. "The Nepalese Perspective" Vol. VI, No. 20, 22, 24, Feb. 21, March 7, March 21, 1970.
8. "Österreichischen Alpenvereins" Jahrgang 25, Heft 1/2, Jan./Feb. 1970.
9. "Rivista mensile" Anno 91, No. 1, Gennaio 1970.
10. "Till Fjälls", 1968.
11. "Der Bergsteiger" Jahrgang 37, Heft 3, März 1970.

- From Mr. H. C. Sarin through Sadoo Tambe
1. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
2. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
3. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
4. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
5. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
6. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
7. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
8. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
9. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
10. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
11. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966

- From Mr. H. C. Sarin through Sadoo Tambe
1. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
2. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
3. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
4. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
5. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
6. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
7. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
8. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
9. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
10. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
11. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966

- From Mr. H. C. Sarin through Sadoo Tambe
1. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
2. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
3. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
4. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
5. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
6. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
7. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
8. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
9. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
10. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
11. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966

- From Mr. H. C. Sarin through Sadoo Tambe
1. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
2. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
3. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
4. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
5. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
6. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
7. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
8. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
9. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
10. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
11. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966

- From Mr. H. C. Sarin through Sadoo Tambe
1. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
2. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
3. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
4. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
5. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
6. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
7. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
8. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
9. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
10. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
11. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966

- From Mr. H. C. Sarin through Sadoo Tambe
1. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
2. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
3. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
4. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
5. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
6. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
7. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
8. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
9. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
10. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
11. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966

- From Mr. H. C. Sarin through Sadoo Tambe
1. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
2. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
3. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
4. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
5. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
6. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
7. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
8. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
9. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
10. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966
11. "The Himalayas", Calcutta, D. Mordecia of Daw Sen, 1966

会務報告

五月理事評議員会

(六日午後七時本会ホール)

出席者 三田会長、吉沢、深田副会長、中屋、藤井、山崎、丹部、野上、小倉、浜野、神原、熊谷、芳野、松永、倉知、川上各理事、田口、金坂、渡辺、三田各評議員、今井監事

三田会長から、新しい顔振れでJACの仕事の円滑にやっていたいねあいさつがあり、出席者の自己紹介の後、理事にうつる。なお本年度の理事会は毎月第一水曜日とすることにした。

△議事
理事会務分担の件 (藤井)
四十五年度理事會務担当は次のとおり決定。

・総務、自然保護(中屋)
・総務、山莊、支部(藤井)
・総務、庶務(山崎)
・会計(中島)ただしエベレストから

帰国までは川上理事が担当する。
・庶務(丹部)
・集金、学生部(川上)
・婦人懇談会(小倉)
・学生部、日山協(浜野)
・学生部、日山協(宮下)
・山岳(倉知)
・図書(野上)
・山日記(牧野内)
・学生部(熊谷)
・指導、研究(松永)
・海外(神原)
・日山協(芳野)
・医療(大森)
・常務理事互選の件 (藤井)
・常務理事は中屋、藤井、山崎、丹部
中島と決定

・常務理事互選の件 (藤井)
・常務理事は中屋、藤井、山崎、丹部
中島と決定
・別室で評議員互選の件 (村山)
・別室で評議員会を開き、常任評議員として加藤、折井、金坂、渡辺(兵)
・村山、中田の六氏を常任評議員と決定
・成田隊員死亡の件 (田辺)
・宮下理事が遺言引き取りに成田隊員の父君と五月五日朝カトマンズに向かった。五月十日羽田空港で告別式を行った。五月(与野)での葬儀は近親者のみで行なう。費用は一応エベレスト勘定として細部は常務理事会に一任とする。またこの連絡責任者は山崎理事とする。

・共同通信社南米自動車横断旅行に日本山岳会後援名義の件 (吉沢)
・日本国内に限り後援名義を許可することに決定。
・UIAA総会の件 (吉沢)
・本年度は六月十八日—二十四日ギリシャのクレタ島で開かれるが、本年度JAC代表の出席は辞退することに決定
△報告
・慶大隊バウダ峰遭難の件 (田辺)
・早大隊ツクチェ峰遭難の件 (浜野)
・エベレスト登山隊の件 (浜野)
・大塚隊長からの報告が遅れているが

・共同通信社南米自動車横断旅行に日本山岳会後援名義の件 (吉沢)
・日本国内に限り後援名義を許可することに決定。
・UIAA総会の件 (吉沢)
・本年度は六月十八日—二十四日ギリシャのクレタ島で開かれるが、本年度JAC代表の出席は辞退することに決定
△報告
・慶大隊バウダ峰遭難の件 (田辺)
・早大隊ツクチェ峰遭難の件 (浜野)
・エベレスト登山隊の件 (浜野)
・大塚隊長からの報告が遅れているが

・共同通信社南米自動車横断旅行に日本山岳会後援名義の件 (吉沢)
・日本国内に限り後援名義を許可することに決定。
・UIAA総会の件 (吉沢)
・本年度は六月十八日—二十四日ギリシャのクレタ島で開かれるが、本年度JAC代表の出席は辞退することに決定
△報告
・慶大隊バウダ峰遭難の件 (田辺)
・早大隊ツクチェ峰遭難の件 (浜野)
・エベレスト登山隊の件 (浜野)
・大塚隊長からの報告が遅れているが

・共同通信社南米自動車横断旅行に日本山岳会後援名義の件 (吉沢)
・日本国内に限り後援名義を許可することに決定。
・UIAA総会の件 (吉沢)
・本年度は六月十八日—二十四日ギリシャのクレタ島で開かれるが、本年度JAC代表の出席は辞退することに決定
△報告
・慶大隊バウダ峰遭難の件 (田辺)
・早大隊ツクチェ峰遭難の件 (浜野)
・エベレスト登山隊の件 (浜野)
・大塚隊長からの報告が遅れているが

・共同通信社南米自動車横断旅行に日本山岳会後援名義の件 (吉沢)
・日本国内に限り後援名義を許可することに決定。
・UIAA総会の件 (吉沢)
・本年度は六月十八日—二十四日ギリシャのクレタ島で開かれるが、本年度JAC代表の出席は辞退することに決定
△報告
・慶大隊バウダ峰遭難の件 (田辺)
・早大隊ツクチェ峰遭難の件 (浜野)
・エベレスト登山隊の件 (浜野)
・大塚隊長からの報告が遅れているが

・共同通信社南米自動車横断旅行に日本山岳会後援名義の件 (吉沢)
・日本国内に限り後援名義を許可することに決定。
・UIAA総会の件 (吉沢)
・本年度は六月十八日—二十四日ギリシャのクレタ島で開かれるが、本年度JAC代表の出席は辞退することに決定
△報告
・慶大隊バウダ峰遭難の件 (田辺)
・早大隊ツクチェ峰遭難の件 (浜野)
・エベレスト登山隊の件 (浜野)
・大塚隊長からの報告が遅れているが

五月上旬東南橋から第一回の登頂を試みることにしている。
・エベレスト科学調査隊の件(芳野)
・エベレスト留守本部と連絡し検討する。
・多摩川自然保護の件 (中屋)

昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会

昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会

昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会

昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会

昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会

昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会

昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会
昭和四十五年度通常會員総会

昭和四十四年度事業報告

(飯野常務理事)

報告書のとおり了承
各支部報告

・越後支部(藤島支部長)

事業計画、支部長会議を六月二十日
前後に新潟で開催、高頭氏「日本山
嶽志」刊行出版記念会(佐渡)

・富山支部(中田支部長)

土曜日に土曜会を開いている。

年十二・三回委員会を持つ。

・山梨支部(山村支部長代理)

山行は実践を主として二十三回、六
十七日行なう。

・第一水曜に集会、研究会二回、毎
月一回支部通信。

五月十七・十七日金山平木暮祭開催
総会六月の予定。

・秋田支部(佐藤支部長代理)

十周年記念講演会「第七次南極越冬
隊員の「南極もよまた話」

・会員海外登山報告会

十周年記念自然保護と高山植物研修
会(駒ヶ岳)

十周年記念冬山の集い(海外登山研
究会)

・四十五年度計画、支部会報(J・A
・秋田)の発行年四回。

・親睦山行春秋各一回

・北海道支部(中野支部長)

四十四年七月設立
シエラ・クラブ員の来道者接待。

・小集會 西村氏「チリ・パタゴニ
アの話」

・四十五年度 会報二・三回発行、名
簿作成、小集會五・六回予定。

・昭和四十四年度収支決算報告(別項)

・文部省補助金八、八〇〇、〇〇〇エ
ベレスト登山関係が繰込まれている

ことに了承願いたい。

昭和四十四年度財産目録報告(別項)

(以上飯野常務理事)

・監事による監査報告

(堀田監事)

以上三件承認

②議案

昭和四十五年度役員選任の件

四十五年度役員として次の各氏を選
任した。

・理事 三田幸夫、吉沢一郎、深田
久弥、山崎安治、小倉董子、川上隆

中島寛、浜野吉生、野上成男、牧野
内昭武(以上再任) 中屋健二、藤井

運平、神原達、芳野越天、松永敏郎
熊谷義信、大森薫雄、宮下秀樹、倉

知敬、丹部節雄(以上新任)

・監事 今井雄二(新任)

・評議員 津田周二(再任) 堀田弥
一、加藤泰安、田口二郎、辰沼広吉

渡辺兵次、伊達篤郎(以上新任)

昭和四十五年度事業計画案討議の件

(山崎常務理事)

・神河内山荘の補修、改装を重点化し
たい。

・別項議案を承認

・日高名誉会員 補足「自然保護の推
進」自然保護憲章設定の決議協議会

発足し近年公害の話題多くあること
から憲章研究部会(林修三)を設立

鋭意努力中である。

昭和四十五年度収支予算案討議の件

(飯野理事)

・前年度予算に一部修正がある。

・日高名誉会員質問 山荘に於けるの
予算措置は予備費か。

・実際に別立ての会計になる。

・名簿には職場(特に電話)を入れて
ほしい。

・折井健一評議員報告

・行政上の措置として中華全国山岳委
員会設立に関して簡単な事情説明あ

り、委員来日につき歓迎会(日本山
岳協会主催)開催、日本からの登山
隊の数が多く、多分に世話になって
いる現状である、新組織を理解して
ほしい。

・日高名誉会員 日本ネパール文化協
会会長として万博ネパール館建設に
日本山岳会の協力に対し謝意を表す

・閉会挨拶(吉沢副会長)

・日本山岳会の事業は内外ともによま
す多忙になりつつある。

・出席者 三田幸夫、横有恒、飯野亨
川上隆、野上成男、山崎安治、佐藤
兼治、堀内章雄、国見利夫、三浦忠
臣、荒巻広政、吉沢一郎、名見耶達
男、中田勇吉、山村正光、折井健一
藤井運平、諸岡一、日高信六郎、
小林猛臣、今井雄二、網蔵志朗、西
諒、神谷恭、野口未延、松永敏郎、
永原輝雄、菅沢豊隆、今井嘉道、山
崎金次郎、川崎精雄、佐藤之敏、吉
武正子、具森健治、熊谷義信、辰沼
広吉、堀田弥一、深田久弥、藤島玄
鈴木邦之、金坂一郎、松本敏次郎、
島田興、須田紀子、坂本肇、藤島敏
男、神原達、梶正彦、石原憲治、中
屋健一、瀬名貞利、中野征紀、森山
重禧、佐々保雄、加藤泰安、室賀輝
男、入沢文明、小倉董子、山下一夫
織内信彦、堀川英司郎、関口周也、
丹部節雄、山本朋三郎(以上64名)

昭和四十五年度事業計画案

一、登山の指導奨励に必要な集会、研
究会、講習会および展覧会などの開催

(イ) 集会

・小集會(報告、講演会ならびにシン
ポジウム)場所本会、年間十回

・第二十四回ウェストン祭、上高地、
六月六、七日

・有志関係会 六義園心泉亭六月二十
日

・支部長会議 本会、四月、十二月

(他)支部持ちまわり一回

・在日外国登山家との交歓 十月中旬

・年次晩餐会 十二月四日

・来日外国人との交歓 ヒラリー・卿七
月、その他は随時

(他)支部持ちまわり一回

・在日外国登山家との交歓 十月中旬

・年次晩餐会 十二月四日

・来日外国人との交歓 ヒラリー・卿七
月、その他は随時

(イ) 研究会 雪崩研究会十一月中旬

(ロ) 講習会

・登山技術研修会 六月または十一月

・スキー技術講習会 一月中旬

(ニ) 展覧会

・年次晩餐会に際し「この一本展」に
準ずる展示を行なう。十二月四日

・登山施設の改善の促進、その他登
山のための適切な事業

・上高地に「神河内山荘」を開設 六
月・十月下旬

・神河内山荘改築準備(委員会を設
置して本格的準備、検討を開始する)

・三、山岳遭難の予防とその対策に関す
る企画および指導

・富士山頂に夏山診療所開設

・各大学医学部山岳部による夏山診療
所に対する援助 七月・八月

四、自然保護活動の推進

・自然保護委員会で国立公園内の自然
保護運動に協力

五、海外登山の企画および指導

・昭和四十五年ブレンスーンのエベ
レスト登山実施

・エベレスト山域における学術調査経
統

六、機関誌「山岳」会報および「山
日記」その他図書の刊行

・「山岳」第六十五年の発行 三月

・会報「山」十二回発行 月刊

・「山日記」昭和四十六年度版発行

・山岳図書交換会など

七、目的を同じくする国内および国外
団体との連絡情報交換

・海外連絡委員会は世界の山岳団体と
連絡を取り、情報の交換ならびに機関
誌の交換を行なう

八、その他、目的を達成するための必
要な事業を行なう。

四月支部長会議

(二十六日十一時本会ルーム)

・出席者 吉沢、深田副会長、藤井、
山崎、丹部、松永理事

・熊沢、山本、中田、藤島、中野、柴
田、西、小島、佐藤各支部長および
代理

・深田副会長あいさつ 地方会員は全
体の六割にも当りながら山岳や会報で
つながっているだけで会を利用する機
会が少ない。会としても出来るだけサ
ービスに心がけたい。また支部の予算
も少ないが各支部長の努力に感謝して
いる。

・二十五日の総会に欠席した静岡、石
川、東海各支部から現況報告があった
静岡(山本) 現在会員数五十五名、
毎年二・三名増え、退会者は少
ない。年三回小集會として懇親山行を
行なっている。支部会費は年千円。

・石川(小島) 支部会員は七十五名、
うち本会員は二十一、残りは準会員
としており。支部のルーム建設を推進
しており本年中に完成させたい。

・東海(熊沢) 支部報五号・七号を発
行した、また海外登山報を出した。合
宿はヒマラヤ登山を考慮し立山や剣で
行なっている。マカール・連峰隊はチー
ムワークもよく順調に進んでいる。

・その他、会報、山岳の内容について
支部側から注文があり、来年の総会
後のパーティは紅茶会ではなく少くもビ
ール・パーティくらい開いてほしいな
ど要望が出た。理事側と種々懇談を行
ない午後四時半散会した。

第二五八回現地小集會報告

今回は山形支部の後援により蔵王の
ドック沼畔の山の家を根拠地として現

地小集会が行なわれた。

三月十二日、ツアー希望の人はロープウェイ中間駅近くのトドマツヒュッテに十三時に集合。後藤山形支部長の案内で樹木原コースを少し登り、ロープウェイの鉄塔をめざして左へ新雪をふみ樹木の間をトラバースしてカラサワリフトの途中へ出る。昨日から来られていた金坂一郎氏一家、福島支部の三名、など十数人がすすいと愉しそうに滑って行く。

今年は雪が多く立派な樹氷が残っている。スキーヤーも多い。山の家の沼もまだ埋まっている。

十九時三十分より外来食堂を貸り切って懇親会に入る。川上隆集会委員の司会、現地の方々のもてなしの朝日山で村井米子氏の乾杯に続いてジギスカン料理をつき始める。ここの料理はいつも美味しい。せいさい漬、なめこ汁に白髪ねぎの入ったのがいい味で、ついたべすぎた。静岡支部の鶴見氏が自作の甘い蜜柑を一杯もって来られた。

食後の雑談、大学講座と称して雑学がいろいろ飛び出す。ためになる話も多い。山岳会の方々は話題が多くていつも感心する。主にインドやネパールの話。落ち着いたところで明日の滑るコースの説明があつて散会。

三月二十九日、上の山へ

のツアーコースは歩きが多いということとで中止になり、森山氏のリーダーで地蔵岳へ出かける。さんげ坂は降るより、肥った体をもち上げるのに汗で難儀してさんげしたくなる。ロープウェイ駅の建物が出来てから吹きだまりとなつて深く埋ってしまう様になった地蔵様の首まで掘出してあるの上からカメラを向ける。

山頂は無風状態でこんなことは年に一回位で珍しいとのこと。熊野岳へ散歩に出かける人も多い。陽にあたりながら昼食。月山、朝日、飯豊、吾妻が圍繞する。頂からザンゲコースを降りす樹木の間をトドマツヒュッテをめざして新雪を下降する。さすがは山スキー党が多く半数はカンダハ、中には単板スキーの方もおられる。すごい快晴で樹木の影が藍い。コースを外している人にも逢わずわれわれだけの山となつて静かで気分がいい。中間駅からはコースに入つてびゅんびゅん飛ばす。北海道仕込みのスキーの達人、藤井運平氏はすごい速さですつ飛んで行かれた。安定した滑り方をなさる。あつという間に下へ着く。もう一回中間駅までロープで上りドコ沼へ行く人達と別れる。皆満ち足りた顔でかがやいていた。私と藤井氏にまた森山氏に伴われて今のコースをもう一回降った。

今回の計画に大変お骨折下さった山形支部の方々に誌上を借りて御礼申し上げます。

(集会・婦人懇談会委員斎藤桂)

ルーム日誌(45年4月)

- 7日(火) 図書委員会日
- 8日(水) 常務理事会日
- 13日(月) 中央大学O・B委員会
- 14日(火) 医療連絡会
- 15日(水) 理事評議会
- 17日(金) 婦人懇談会委員会

18日(土) 学生部総会
25日(土) 昭和四十五年度通常會員総会
26日(日) 支部長会議
四月中来室者三三八名

松方三郎隊長帰国

エベレスト登山隊長松方三郎氏は五月九日午後十時五十八分羽田着の日航機で帰国した。同隊長は成田隊員の急死で予定を変更、遺骨を持ってヘリコプターでカトマンズに戻り、遺骨を父正二氏に手渡し、一足先に帰国したものの。

成田隊員遺骨帰る

四月二十一日クーンプ氷河六〇〇mの第一キャンプで急死した成田潔思隊員の遺骨は父正二氏に抱かれ第二次偵察隊長宮下秀樹氏がつきそい五月十日午後四時羽田着日航機で帰国した。遺骨はJAC旗、同隊員のエベレストでの雄姿、エベレスト南壁などの写真を飾った空港特別室に安置され、告別式が行なわれた。母信子さん、妹の味佑記、佳寿子さんはじめ日本山岳会、慶大山岳部、勤務先の日本冷蔵などの

関係者が多数参集、前夜九日帰国した松方隊長から最後のようが報告され、白いカーネーションをささげて故人の冥福を祈った。
今回の告別式は即急に行なったため會員各位への通知もれもあったと思います。不備の点をお詫び申し上げます。

あとかき 本号は三百号。ちょうどタイミングよくエベレスト登頂のニュースが伝えられ巻頭を飾れたのは喜ばしい。本誌がお手もとにとどくころは隊員たちも元気に帰国してくると思う。土産話がまた楽しみである。

五月三十、三十一の両日、土樽の高波君策さんの山の家で図書委員会の懇親会を開いた。山菜をさかんに盛大に飲みかつ喰い、大いに楽しんだ。三十一日は逢峠を越え、久しぶりで一ノ倉やマチガ沢などのぞいてきたが、一ノ倉沢出合までの旧道はすっかり舗装され、ガード・レールなども付いて、マイ・カー族が続々とガソリンのおいをまきちらしている仕末。芝倉沢の出合あたりまで咲き乱れていたコブシの花や、イワカガミ、ツツジなどもまったく一ノ倉沢の出合をすぎると姿を消してしまっている。もうこんなところにもあき果てた話である。

(山崎)

昭和四十五年六月十日発行

東京都千代田区神田錦町
三一二三 向井ビル

発行所 法人 日本山岳会
編集代表 山崎 安治

(293) 七四四一
振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金600円也
送料 別受け 金120円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道2~15、電話(943)0311(代表)
大阪店・都島区相生町7、電話(352)3491(代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15、電話(731)7331(代表)
工場：大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は

日本団体生命

へ

角筈支部(専門取扱営業所)

東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内
電話(352)1556・1557

昭和44年度収支決算表

自昭和44年4月11日
至昭和45年3月31日

(単位円)

歳入		歳出	
科 目	予 算	決 算	予算に対する 決算増減(△)
経常収入	6,150,000	6,958,551	808,551
入会金	900,000	1,265,000	365,000
終身会費	5,150,000	5,663,551	513,551
事業収入	3,040,000	2,963,920	△ 76,080
広告料	850,000	794,400	△ 55,600
(内)山岳関係	(600,000)	(587,000)	(△ 13,000)
山刊物税	500,000	500,000	0
山刊物使用料	1,600,000	1,527,420	△ 72,580
(内)山刊物使用料	90,000	(1,469,320)	△ 142,100
雑収入	280,000	809,051	529,051
雑収入	80,000	166,747	86,747
雑収入	200,000	642,304	442,304
クラブタイ勘定		210,411	210,411
一般会計小計	9,470,000	10,941,933	1,471,933
エ登山関係収入	97,000,000	95,952,278	△ 1,047,722
繰越	3,358,325	3,358,325	0
合 計	109,828,325	110,252,536	424,211

組立用本棚	1	3,971
スエール	1	16,408
電機	1	5,318
ホーレス	3	25,137
エベレスト	11	271,700
合 計		969,571

種 類	冊(枚)数	金 額
洋書	829	1,658,000
和書	2,153	1,722,400
地 図	274	72,440
合 計	3,256	3,452,840

5) 絵 画	20 点 他	500,000
(参 考)		
未収金 広告料		36,000
未払金 エベレスト登山関係		9,366,953
社団法人日本山岳会昭和44年度収支決算表及び財産目録につき、監査致しましたところ其の正確なことを認めます。		
昭和45年3月31日		
監 事 堀 田 弥 一		
同 上 小 原 勝 郎		

昭和45年度収支予算表(案)

(△印前年度比減)

歳入		歳出	
科 目	予 算	前年度予算	増 減
経常収入	6,050,000	6,150,000	△ 100,000
入会金	900,000	900,000	0
終身会費	5,150,000	5,150,000	0
事業収入	3,000,000	3,040,000	△ 40,000
広告料	600,000	600,000	0
山刊物税	250,000	250,000	0
山刊物使用料	500,000	500,000	0
(内)山刊物使用料	1,600,000	1,600,000	0
雑収入	320,000	280,000	40,000
雑収入	20,000	80,000	△ 60,000
雑収入	300,000	200,000	100,000
エ登山関係収入	15,000,000	97,000,000	△82,000,000
一般会計小計	24,370,000	106,470,000	△82,000,000
前年度繰越	6,552,790	3,358,325	3,194,465
合 計	30,922,790	109,828,325	△78,905,535
歳出		歳入	
科 目	予 算	前年度予算	増 減
運営管理費	5,134,000	4,684,000	450,000
文具費	1,540,000	1,150,000	390,000
印刷費	150,000	120,000	30,000
雑費	200,000	150,000	50,000

歳出		歳入	
科 目	予 算	決 算	予算に対する 決算増減(△)
運営管理費	4,684,000	5,382,412	698,412
文具費	1,150,000	1,409,000	259,000
印刷費	120,000	189,074	69,074
雑費	150,000	253,130	103,130
山刊物税	290,000	275,680	△ 14,320
山刊物使用料	950,000	1,096,324	146,324
(内)山刊物使用料	1,213,000	1,160,586	△ 52,414
雑収入	21,000	20,458	△ 542
雑収入	70,000	51,200	△ 18,800
雑収入	20,000	12,700	△ 7,300
雑収入	80,000	85,325	5,325
雑収入	80,000	158,082	78,082
雑収入	50,000	105,790	55,790
雑収入	50,000	137,327	87,327
雑収入	200,000	65,630	△ 134,370
雑収入	90,000	115,366	25,366
雑収入	50,000	61,635	11,635
雑収入	100,000	57,400	△ 42,600
雑収入		127,705	127,705
事業費	4,220,000	3,978,308	△ 241,692
出版費	950,000	953,570	3,570
出版費	2,760,000	2,009,040	△ 750,960
出版費	150,000	133,140	△ 15,860
出版費	80,000	37,885	△ 42,115
出版費	130,000	78,033	△ 51,967
出版費	150,000	195,900	45,900
出版費		40,000	40,000
出版費		530,740	530,740
一般小計	8,904,000	9,360,720	456,720
エ登山関係収入	100,000,000	94,339,026	△ 5,660,974
繰越	200,000		△ 200,000
繰越	724,325	6,552,790	5,828,465
合 計	109,828,325	110,252,536	424,211

用途	位 置	構造	坪数	取年月日	得 価	帳 簿
山岳研究所	長野県南安曇郡安曇村上高地国有林13林小班	木造トタン葺平家建	22坪	昭和36年5月25日	550,000	

種 類	数量	金 額
宛名カードケース	1	10,563
宛名カードケース	1	3,698
宛名カードケース	1	12,867
宛名カードケース	1	9,854
宛名カードケース	1	3,982
宛名カードケース	2	73,000
宛名カードケース	2	10,263
宛名カードケース	1	5,927
宛名カードケース	4	24,172
宛名カードケース	46	86,819
宛名カードケース	15	134,247
宛名カードケース	1	11,816
宛名カードケース	1	44,859
宛名カードケース	4	29,404
宛名カードケース	1	41,863
宛名カードケース	4	128,284
宛名カードケース	1	7,358
宛名カードケース	1	3,681
宛名カードケース	2	5,335

資産総額 18,125,201円

1. 基本財産 100,000

1. 運用財産 18,025,201

内訳 1. 基本財産

種 類 預 入 先 金 額

貸付信託 日本信託銀行本店 100,000

1. 運用財産

1) 現金及預貯金

種 類 預 入 先 金 額

現金 301,189

普通預金 263,750

東京銀行本店 13,400

八十二銀行本店 154,484

協和銀行本店 948,539

協和銀行本店 10,128,261

協和銀行本店 321,137

協和銀行本店 263,635

協和銀行本店 111,469

協和銀行本店 51,162

協和銀行本店 478,263

協和銀行本店 141,206

協和銀行本店 861,001

協和銀行本店 7,810,275

協和銀行本店 300,000

協和銀行本店 25,569

協和銀行本店 6,000,000

協和銀行本店 12,552,790

計 12,552,790

当座預金 300,000

定期預金 300,000

振替預金 300,000

保 証 金 300,000

計 300,000

[参考] 1. 終身会費 360,000を含む。

(定期預金 300,000 現金 60,000)

2. 印 埃ベレスト関係

交通通信	290,000	290,000	0
通 信	1,000,000	950,000	50,000
運 送	1,190,000	1,213,000	△ 23,000
運 送	21,000	21,000	0
運 送	70,000	70,000	0
運 送	13,000	20,000	△ 7,000
運 送	80,000	80,000	0
運 送	100,000	80,000	20,000
運 送	50,000	50,000	0
運 送	50,000	50,000	0
運 送	100,000	200,000	△ 100,000
運 送	130,000	90,000	40,000
運 送	50,000	50,000	0
運 送	100,000	100,000	0
事業費	4,680,000	4,220,000	100,000
出版費	950,000	950,000	0
出版費	2,800,000	2,760,000	40,000
出版費	150,000	150,000	0
出版費	50,000	80,000	△ 30,000
出版費	30,000	130,000	0
出版費	300,000		300,000
出版費	150,000	150,000	0
出版費	150,000		150,000
一般小計	15,000,000	100,000,000	△85,000,000
エ登山関係収入	24,814,000	108,904,000	△84,090,000
繰越	150,000	200,000	△ 50,000
繰越	5,958,790	724,325	5,234,465
合 計	30,923,790	109,828,325	△78,905,535